様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

平成 ３０ 年　 ６ 月　 ６ 日現在

機関番号：３２６６５
研究種目：基盤研究(C)（一般）
研究期間：2015～2017
課題番号：１５Ｋ０２３２０

研究課題名（和文）ジョージ・オーウェルに関するトランス・アトランティック研究

研究課題名（英文）A Transatlantic Study of George Orwell

研究代表者
近藤　直樹（KONDO, Naoki）

日本大学・生物資源科学部・講師

研究者番号：１０７１１６９０

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　1,200,000円

研究成果の概要（和文）：　本研究では、20世紀前半の英米関係を視野に入れて、イギリスの作家ジョージ・オーウェル（1903～50）の小説やエッセイを読解・分析した。具体的には、(1)オーウェルがアメリカの文学作品や、そこに見出される道徳観についてどう考えたか、(2)アメリカ文化の影響を受けたイギリスの大衆文化についてどう考えたか、(3)第二次世界大戦中から戦後の英米関係についてどう考えたか――の三点を明らかにした。

研究成果の概要（英文）：　In this study, I examined novels and essays by George Orwell (1903-50), a British writer, considering the background of the British-American relationship in the former part of the 20th century. I particularly clarified Orwell's consideration of (1) American literary works and the moral sense represented in them, (2) American culture's huge impact on British popular culture, and (3) the British-American relationship during and after World War Two.

研究分野：イギリス文学

キーワード：ジョージ・オーウェル　英米関係　ミドルブラウ文化

１．研究開始当初の背景

本研究を開始した平成 27 年当時、英国の文学作品を「トランス・アトランティック」に、すなわち、大西洋を挟んだ国々との関係を視野に入れて読み直す作業が、イギリス文学研究でさかんになっていた。とりわけ英米関係については、個別の文学者の作品を二国間の関係の中で捉え直す作業が国内外で広く行われ、大きな成果が生まれていた。

しかし、20 世紀英国の代表的作家の一人、ジョージ・オーウェル（1903～50）については、その作業はまだ開拓の余地があった。ゆえに、本研究では、オーウェルのエッセイや小説を、20 世紀前半の英米の歴史・文化・政治的関係を視野に入れて読み直し、彼のアメリカ観を洗い出すことをめざした。

２．研究の目的

本研究では、オーウェルのエッセイや小説を英米関係の中で読み直し、新たな意義を見出すことを目的とした。具体的には、彼の主要エッセイ「ラッフルズとミス・ブランディッシュ」（1944）や、代表作の小説『1984 年』（1949）などを、20 世紀前半の英米の歴史・文化・政治的関係を視野に入れて分析し、彼のアメリカに対する視点を明らかにすることをめざした。

特に注目したのは、(1)アメリカの文学作品や、そこに見出される道徳観に対する彼の見方。(2)第二次世界大戦後、「世界の大国」となったアメリカを、彼がどのように見ていたのか。――の二点であった。研究が進むにつれて、(3)アメリカ文化の影響を受けたイギリスの大衆文化に対する彼の（批判的）視点にも興味が向いた。ゆえに、以上の三点を明らかにすることをめざした。

３．研究の方法

(1)平成 27 年度

27 年度は、アメリカの大衆文化に対するオーウェルの批判的視点に焦点を当てて研究を進めた。

4～7 月は、エッセイ「ラッフルズとミス・ブランディッシュ」（1944）や「鯨の腹の中で」（1940）、一連の映画評など、アメリカ文化に対する彼の見方がよくあらわれた資料を読解・分析した。オーウェルはアメリカの大衆文化に対して批判的だったが、同時代の米国作家、ヘンリー・ミラーを高く評価するなど、アメリカのハイカルチャーについては好意的であった。また、ハリウッド映画の通俗性を批判しつつも、映画的手法を自身のルポルタージュに援用するなど、アメリカ大衆文化に対する批判は、全否定的なものではなかった。このような批判と評価の入り混じった視点を中心に、研究を行った。

8 月は、ロンドン大学セネット・ハウス図書館で資料を収集・分析した。特に、日本では入手困難な、当該テーマに関連の深い雑誌資料を複写（許可されていないものは筆写）して集めた。また、4～7 月の研究成果をまとめ、9 月の学会発表の準備を行った。

9～10 月は、まず、「小説論に見るジョージ・オーウェルのアメリカ観」と題し、欧米言語文化学会第 7 回年次大会にて、研究発表を行った（於日本大学江古田校舎）。また、オーウェルに関する論文・著書のうち、当該テーマに関係の深いものを読解・分析した。具体的には、オーウェルを含む当時のイギリス知識人の文化論について考察した『ジョージ・オーウェルとラディカルな奇人たち』（クリスティン・ブリュメル著）や、オーウェルの映画評についての論考を含む『オーウェルとマザー・グース』（川端　康雄著）などを分析した。

11～12 月は、20 世紀前半の英米関係の歴史・政治・文化に関する資料のうち、当該テーマを考察するうえで重要なものを読解・分析した。具体的には、1930 年代イギリスの状況を詳述した『1930 年代』（ジュリアン・シモンズ著）や、戦間期のイギリスについて論じた『幻滅の時代』（ロナルド・ブライス著）などを分析した。

1 月は、4～12 月の研究を振り返り、論文の構想を練るとともに、遅れの発生した調査に時間を充てた。2～3 月は、年度の研究の集大成として、論文の執筆を行った。

(2)平成 28 年度

28 年度は、第二次世界大戦後、「世界の大国」となったアメリカに対するオーウェルの見方に焦点を当てて研究を進めた。

4～7 月は、エッセイ「ヨーロッパの統合に向けて」（1947）や、アメリカの『パーティザン・レビュー』誌に連載された報告「ロンドン便り」（1941～46）、小説『1984 年』など、「世界の大国アメリカ」に対するオーウェルの見方がよくあらわれた資料を読解・分析した。オーウェルは第二次世界大戦でイギリスの同盟国となったアメリカに感謝し、同じ言語を用いる国として一定の親近感を持っていた。一方で、「民主的社会主義者」としては、資本主義の象徴的存在であるアメリカが、ソ連を始めとする共産圏の対立軸として覇権を握ることには懸念を示した。そして、イギリスを始めとするヨーロッパ諸国が、「民主的社会主義」を核として結集し、東西陣営とは異なる存在感を示すことを求めた。このような愛憎半ばするアメリカ観を詳細に位置づける作業を中心に、研究を進めた。

8 月は、ロンドン大学セネット・ハウス図書館で資料を収集・分析した。特に、日本では入手困難な、当該テーマに関連の深い雑誌資料を複写・筆写した。

9 月は、オーウェルに関する論文・著書のうち、当該テーマに関係の深いものを読解・分析した。具体的には、オーウェルと『パーティザン・レビュー』誌の関係を論じた章を含む『文学的名声の政治学』（ジョン・ロデン著）などを分析した。

10～12 月は、20 世紀前半の英米関係の歴史・政治・文化に関する資料のうち、当該テーマを考察するうえで重要なものを読解・分析した。具体的には、『愛憎の関係――英米の感性に関する研究』（スティーヴン・スペンダー著）などの分析を行った。また、12 月の発表に備え、アメリカの影響を強く受けたイギリスの大衆文化に対するオーウェルの（批判的）視線を検討するために、『インターモダニズム』（クリスティン・ブリュメル編）なども分析した。12 月の後半には、「ジョージ・オーウェルの 1930 年代の小説とミドルブラウ」と題し、中央大学人文科学研究所「ミドルブラウ文化研究会チーム」2016 年度第 2 回公開研究会にて、研究発表を行った（於中央大学駿河台記念館）。また、27 年度の研究成果である論文「小説論に見るジョージ・オーウェルのアメリカ観」が、『湘南英文学』第 11 号（湘南英文学会）に掲載された。1～3 月は、27 年度の 1～3 月と同様の作業を行った。

(3)平成 29 年度

29 年度は、27～28 年度に明らかにできなかった部分を補う研究を行うとともに、発展的課題（オーウェルと、同時代の英国知識人たちのアメリカ大衆文化観の比較や、アメリカにおけるオーウェルの受容過程の分析）を視野に入れて研究を進めた。

4～7 月は、オーウェルが数多く残した書評のうち、当該テーマや発展的課題に関するものを分析した。

8 月は、ロンドン大学セネット・ハウス図書館で資料を収集・分析した。特に、日本では入手困難な、当該テーマや発展的課題に関連の深い雑誌資料を複写・筆写した。

9～10 月は、オーウェルに関する論文・著書のうち、当該テーマや発展的課題に関係の深いものを読解・分析した。具体的には、Q・D・リーヴィスによるオーウェル論を含む『ジョージ・オーウェルの世界』（ミリアム・グロス編）などを分析した。また、4～10 月の成果をまとめ、学術エッセイを執筆した。

11～12 月は、20 世紀前半の英米関係の歴史・政治・文化に関する資料のうち、当該テーマや発展的課題を考察するうえで重要なものを読解・分析した。具体的には、オーウェルとウィンストン・チャーチルの外交政策案の共通性を示唆する『文化浸透の冷戦史』（齋藤　嘉臣著）などを分析した。1～3 月は、27 年度の 1～3 月と同様の作業を行った。3 月には、28 年度の成果を反映した論文「ミドルブラウ文化と郊外と植民地――ジョージ・オーウェルの初期小説――」を含む『英国ミドルブラウ文化研究の挑戦』（中央大学出版部）が出版された。10 月に執筆した学術エッセイ「『空気を求めて』とマス・オブザヴェーション」は、30 年 4 月に『オーウェル研究』第 37 号（日本オーウェル協会）に掲載された。

４．研究成果

(1)平成 27 年度の成果

27 年度の成果は、おもに学会発表「小説論に見るジョージ・オーウェルのアメリカ観」（2015）と、それに基づいた論文「小説論に見るジョージ・オーウェルのアメリカ観」（2016）にまとめた。ここでは、オーウェルのエッセイ「ラッフルズとミス・ブランディッシュ」や「鯨の腹の中で」などの小説論を分析し、彼のアメリカ観を明らかにした。

「ラッフルズとミス・ブランディッシュ」には、イギリスの大衆小説がアメリカの影響を受けて退廃的になり、イギリス人の道徳観がアメリカ的なものへ悪化しているという考えや、前者を後者から守る必要があるという考えが読み取れる。押し寄せるアメリカ文化の波からイギリス文化を守るべきだという見方は、アメリカの大衆文化と商業主義を結びつけて批判した Q・D・リーヴィスなど、当時のイギリスの文学者や知識人の多くが共有していた。

「鯨の腹の中で」には、アメリカの純文学作品に対する留保つきの評価だけでなく、アメリカの自由・平等に対する称賛および産業主義に対する批判という、アンビヴァレントなアメリカ観が見出せる。これもまた、アメリカの民主主義の価値を認めつつ、その商業主義には批判的だった J・B・プリーストリーなど、同時代のイギリスの文学者や知識人の見方と共通していた。

小説論に読み取れるこのような見解は、英米関係を含む実際の国際政治に関する 1940 年代のオーウェルの見方を考えるうえでも重要だと思われる。というのも、そこには、超大国の地位をイギリスから引き継ぎつつあるアメリカへの、愛憎半ばする視点が見出せるからである。

(2)平成 28 年度の成果

28 年度の成果は、おもに学会発表「ジョージ・オーウェルの 1930 年代の小説とミドルブラウ」（2016）と、それに基づく共著書所収の論文「ミドルブラウ文化と郊外と植民地――ジョージ・オーウェルの初期小説――」（2018）にまとめた。ここでは、オーウェルの初期小説『ビルマの日々』（1934）、『牧師の娘』（1935）、『葉蘭をそよがせよ』（1936）を分析し、アメリカの影響を受けたイギリスの大衆文化（ミドルブラウ文化）に対する彼のアンビヴァレントな見方を明らかにした。

オーウェルの初期小説を読み直すことで見えてくるのは、当時のイギリスのハイブラウおよび通俗文学に対する視線の揺らぎである。彼は前者を高く評価したが、それが孕むスノビズム、ボヘミアニズム、階級・経済的排他性、読者の少なさなどは批判した。一方で、後者の面白さや、多くの「庶民」に読まれていることの価値は認めた。後者への評価は特に『葉蘭をそよがせよ』で高まり、ハ

イブラウ文化とミドルブラウ文化の序列化の曖昧性が示唆されるに至っている。この背景には、オーウェルの個人的経験や社会の大衆化、彼の構想した社会主義運動などがあった。

このようなオーウェルの関心は 1930 年代を通して続き、四作目の小説『空気を求めて』（1939）では、主人公が「俺は馬鹿じゃないがハイブラウでもない」と自己定義している。関心は 40 年代にも持続し、たとえば第二次世界大戦中の 41～43 年、トーク番組アシスタント（後にプロデューサー）として BBC に勤務した際の、ラジオ番組の企画や台本執筆にも影響したと思われる。E・M・フォースターや BBC の同僚だったウィリアム・エンプソンら、いわゆるハイブラウな文学者を招いた本や詩に関するトーク番組（1942）、また、ジョナサン・スウィフトとの架空の対談やアナトール・フランスの短篇小説の脚色といった、古典や外国文学を親しみやすいかたちで伝える番組（1942、1943）などは、彼のミドルブラウ文学に対する見方と関連づけて検討できると思われる。

(3)平成 29 年度の成果

29 年度の成果の一部は、学術エッセイ「『空気を求めて』とマス・オブザヴェーション」（2018）にまとめた。ここでは、ハンフリー・ジェニングズとチャールズ・マッジが編集した『1937 年 5 月 12 日――マス・オブザヴェーション調査』（1937）と、オーウェルの小説『空気を求めて』の類似点を指摘した。『5 月 12 日』の第 2 部に登場する 19 歳独身男性の銀行事務員は、『空気を求めて』の第 3 部第 1 章に登場する青年を思い出させる。このような青年は当時のイギリスではよく見られ、特定のモデルはいなかったのかもしれないが、年齢、職業、住所（ロンドン郊外）、意義を見出せない仕事など、両者には共通点が多く、オーウェルが『5 月 12 日』の青年を人物造形のヒントにしたと推測することもできるのではないか。

より大きな成果については、30 年度中に論文として発表する予定である。そこでは、オーウェルとウィンストン・チャーチルの外交政策案の共通性や、アメリカにおけるオーウェルの受容過程などを考察するつもりである。検討するオーウェルの作品については、小説『1984 年』やエッセイ「ヨーロッパの統合に向けて」などを考えている。

５．主な発表論文等
（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計 2 件）

①近藤　直樹、『空気を求めて』とマス・オブザヴェーション、『オーウェル研究』第 37 号、日本オーウェル協会、査読無、2018、pp.15-17。

②近藤　直樹、小説論に見るジョージ・オーウェルのアメリカ観、『湘南英文学』第 11 号、湘南英文学会、査読有、2016、pp.39-57。

〔学会発表〕（計 2 件）

① 近藤　直樹、ジョージ・オーウェルの 1930 年代の小説とミドルブラウ、中央大学人文科学研究所「ミドルブラウ文化研究会チーム」2016 年度第 2 回公開研究会、2016。

② 近藤　直樹、小説論に見るジョージ・オーウェルのアメリカ観、欧米言語文化学会第 7 回年次大会、2015。

〔図書〕（計 1 件）

① 中央大学人文科学研究所編、武藤　浩史・近藤　直樹・福西　由実子・見市　雅俊・小川　公代・長島　佐恵子・木下誠・加藤　めぐみ・松本　朗・前　協子・渡辺　愛子・秦　邦生・井川　ちとせ著、中央大学出版部、『英国ミドルブラウ文化研究の挑戦』、2018 年、444 ページ、pp.63-85「ミドルブラウ文化と郊外と植民地――ジョージ・オーウェルの初期小説――」担当。

〔産業財産権〕

○出願状況（計 0 件）

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
出願年月日：
国内外の別：

○取得状況（計 0 件）

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
取得年月日：
国内外の別：

〔その他〕
ホームページ等
日本大学研究者情報システム（近藤　直樹）
http://kenkyu-web.cin.nihon-u.ac.jp/Profiles/101/0010062/profile.html

６．研究組織
(1)研究代表者
近藤　直樹　（KONDO, Naoki）
日本大学・生物資源科学部・講師
研究者番号：１０１７１１６９０